

桜吹雪の下で夜毎、昔語りの囁きが…。

千年経った恋物語りは成就するのかい。

## 花月紀伝説

平 龍生

」

匂い立つ風は柔らかであった。

春が巡り来れし千年の昔と変わることなく、古都には鰯：（じょうじょう）とした風気が呼し込まれた。

下河原吉毅は奈良山の麓にある閑居（かんきよ）で過ごす日が多くなっていた。

来年には還暦を迎える齢である。下河原は歴史学者として知られ、特に上代の研究では、つとにその名を知るものが多かった。

奈良に生れついたせいもあるが、下河原は古都の四季折り折りの移り変わりに、白分の心を預けて来た。

いまも、古（いにし）え人の立ち居振舞いの様が、下河原には見えるような気がした。

懐しむ思いの中で半生を生きて来たからである。

大都を彩る緑紬（りよくゆう）の瓦に、朱塗りの柱、そして朱雀大路の賑わい、下河原には春日の条里の風景も眼に浮かんだ。

ところで、下河原はこのところ、鬱屈した想いの中にあった。

奈良朝の政（まつり）ごとの内情や、権力を争った者たちの実像が、必ずしも物語のように美しくないのは知られたことだが、下河原はその裏面吏の一つに関わった自分を、近頃では恨めしく思うようになっていた。

養女として迎えた花紀（はなき）が、興味を寄せたある史実、『木簡人形（もつかんにんぎょう）の研究』が、下河原を妙な事態に追い込んでいた。

それは魔霊に魅入られたような話であった。

下河原と花紀は七カ月ほど前から、奈良山

の贅の寓居（ぐうきよ）で一緒に住むようになった。花紀は幼くして両親をなくし、彼女は親戚の家を転々として育った。

養女となることには周囲の反対もあったが、最後は花紀が決めた。

当時、大学院で花紀は歴史学を専攻していた。彼女自身が学究の徒になるための便宜の法として考えたことと、独身を通して来た下河原の老後の不安などの問題が話としては結了ついた結果ということになる。

特に下河原は健康を害していて、心臓疾レムで以前に入院したこともあり、花紀には老師を助けたいという思いもあったのであった。また、花紀には婚約者の加倉征矢がいたことで、男と女のことについての妙なオシロイ測を持たれなかったことも、養女とする話には幸いした。

加倉は同じ大学の、下河原の愛弟子の一人で、その点でも、下河原は心強い味方を得たような気になった。

だが、花紀が関心を持ったのは、他でもない、千二百年前の呪いの話だったのである。

昭和三十五年に平城京・大膳職（だいでんしき）跡と考えられている井戸から呪いの

人形が発見された。長さ一・五センチ、幅二・五センチほどの板で作られた人形であった。両目と心臓に、五ミリの長さの五寸釘が刺し込まれていた。頭と胴体と二本の脚はあったが、両手はない。顔面には、ひげの跡が見られ、呪われたのは男だと推定できた。

当時、人：は恋の縛（もつ）れ話を口の端にのせ、話題にした。

しかし、誰が、何のために、誰を呪ったのかは、知りようがなかった。

花紀は、実際に、この『木簡人形』を手にしたことがある。展示の仕事に駆り出されたとき、人形（ひとがた）の他の木簡人形や、同じ上代の呪具の一つと見られている人面墨書土器などの陳列を手伝ったのであった。

これは、下河原と花紀が一緒に暮らし始めて、数日しか経っていない日のことであった。

この日の夜、花紀の様子がおかしくなった。襖一枚隔てた部屋で、二人は別：に寝（やす）んでいた。

夜半のこと、花紀の呟きの声を下河原は耳にした。下河原自身も息苦しくなり、目が覚めたのであった。体中から、血の気が引いて

好くような感じがあり、寒気がした。黒い雲のようなものが、定かならぬ宙空で舞っていた。

女の貌（かお）が渦巻状の黒い雲になり、眼と思える二つの光が、下河原に注がれている。その女の貌は、花紀であるように見えたが、別人の女の形相も持っていた。

黒い雲と見たものは女の長い髪の毛だった。その髪が渦巻きのように流れた。何か、隣室から、喚（わめ）きたてる声があった。

その声の花紀のものだったので、このとき、下河原は隣室からの声だと思ったのである。

魘（うな）されるような声だった。

同じことしを何度も繰り返し、叫んでいた。

「わたしの名は…」

と、言ったところまでは聞き取れた。なお、恐ろしげな女の貌は、天井のあたりと思われる高処（たかみ）の場所に止どまっていた。

「わたしの名は、吉備国（き）のくに）のハナヒメじゃ。ヒロツグを殺したのは、このわたしである」

おどろおどろしい声だった。

下河原は、このとき、わが耳を疑った。

吉備国のハナヒメについては、思い当たるふしはなかったが、ヒロツグというのは藤原廣嗣（ひろつぐ）のことにちがいがなかった。

下河原は雑誌社の依頼で「藤原廣嗣の乱」についていま稿を起こしているところであった。花紀にも資料の整理や、原稿の清書などもさせているので、花紀自身の頭の中にも藤原廣嗣の名はある。

ふーと天井に懸かっていた暗雲が払われた。下河原は息苦しさから、解放された。

このときは、嫌な夢を見たとき、自分を納得させた。隣室とは土壁で仕切られている。状況を考えると夢としか言いようがなかった。

夜半に目が覚めてしまうと、老人というのはなかなか寝つくことが出来ないものである。

結局、下河原は起き出し、ひとり、書斎の机の前に坐った。

「藤原廣嗣の乱」の草稿に何やら由縁のようなものを感じて、改めて目を通した。天平一二年（七四

〇）九月三日、藤原廣嗣が朝廷に反旗を翻し、九州・大宰府の地辺で乱を起こした。

拳兵の理由は「時世の得失」を指し、時天地の災厄を

陳(の)下。よって、僧正玄旁(げんとう)法師・右<sup>ナ</sup>土督  
從(うえの)じょうのかみ)五位上を除かんとした構力者  
の専<sup>ギ</sup>に一失報いようというものであった。  
廣嗣の出自は赫<sup>ニ</sup>:(かくかく)たるものである。  
る。

伯父は大宝律令・義老律令の撰修に力を注  
ぎ、律令政治を白ら推進した右大臣・藤原不  
比等(ふひと)であった。

廣嗣は前の式部卿藤原宇合(うまかい  
)の長子であり、また聖武天皇は從兄弟で光  
明皇后は叔母にも当たるといふ血筋であったが  
、不比等の四子(むちまろ)、房前麻呂(ふささき  
まろ)が流行病(はやりやまい)で、急死し  
たことで廣嗣はおのれの庇護者を失った。

大養徳国式部少将次官(やまとのくにかみ  
しき丁しようゆう)の職から左遷され、筑紫  
・大宰府に大宰少貳次官とし派遣された。

藤原一門の不慮の死に乗じた他者の政<sup>チ</sup>  
進出に不満を持った廣嗣は西海道諸国の軍  
団と鎮(ちん)の兵力を集め、朝廷軍と板櫃  
河(いたしつがわ)北九州市・小倉北区・紫  
川で対峙した。廣嗣の率いた軍団は戦力も弱  
く、また任官者で廣嗣自身も統率力が弱か  
ったこと、内に寝返った者も出て、呆氣なく

敗れた。

しかし、この乱の影響は大きく、中詔政<sup>ウ</sup>では、廣嗣とは親族のつながりのある聖武天皇が『朕意（ちんおも）う所あるによって、今月の末、暫く関東に<sup>ウ</sup>かんとす。その時に非ずといえども、事已（や）むこと能（あた）らず。將軍驚怪す<sup>ウ</sup>からず』続日本紀』と、廣嗣討伐の長であった大將軍大野東人（おのおのあずまんど）に勅（ちよく）を残し、平城京を離れ、さらに五年もの間、伊勢、山背の恭仁京（くに）、近江の紫香樂（しがらき）宮、難波宮を転<sup>ウ</sup>とした。

た<sup>ウ</sup>んに、政情の不安定がそうさせたのであり、廣嗣の乱はそれを利しようという者もあつたりして後<sup>ウ</sup>にまで影響を与えた。

怨霊話に似合う背景は持っていたことになる。

ハナヒメが廣嗣を殺した？

このことに関しては史実は、敗走後の藤原廣嗣・綱手の兄弟は一〇月二三日に、肥前国松浦郡値嘉嶋（ちかじま）が五島で捕えられたのち、十一月一日に廣嗣は弟ともども、斬刑に処せられたことになっている。

一〇月二九日、兄弟を捕えた報せは天皇



の許にとどき、天皇は「宜しく法によって処決して、然して後に奏聞（そうん）すし」と勅を発し、この日、天皇は身辺慌しく伊勢に出発した。一月五日に伊勢にとどけられた大將軍大野東人からの文書は「今月一日をもって肥前国松浦郡に廣嗣・綱手を斬ることすでに訖（おわ）んぬ」と報告している。

また、廣嗣は逃亡中、博多から新羅へ船をすすめようとし、国外への道を求めたが、途中、耽羅嶋（とむらじま）―濟州島付近で逆風に遭い、望みが叶わなかったともされる。

下河原は、このとき、呪いの『木簡人形』と、廣嗣の死を結しつけて考えていたのではない。史実としては有り得ない話であることを、あらためて頭の中でたしかめたただけのことであった。

だが、この日以来、花紀の魔の囁きを耳にすることになった。

月半しの満月の夜になると…花紀はハナヒメになり代わり千二百年前の怪異な出来事を語り始めるのであった。

下河原と花紀の間の「魔の時間」のことを知っている者がもう一人いた。

下河原の大学の研究室で助手を務め、また、花紀の婚約者でもある加倉征矢である。  
加倉は『木簡人形』の研究については、参加を求められていなかった。平城宮趾発掘調査隊のメンバーでもある彼は主に佐紀町の発掘現場にいたが多かった。

そのせいもあるが、加倉は自分が仲間外れにされている不満を持っていた。

加倉と花紀は婚約者同士だったが、傍目には他人同士のように見えたにちがいない。二人は連れ立って歩くことも珍しく、肉体関係もなかった。

生硬な感じの研究者タイプというのが、二人の印象であった。

（おれには、いまふうの派手なことの好きな女は似合わない）

加倉が身近にいた地味タイプの花紀に関心を持ったのは、自身が二十七歳であるせいもあったが、花紀が下河原の身の世話をす

るために、養女になりたいと言う話を、最初に加倉に相談したからでもあった。

花紀は恩師を思う真情部分もあったが、このとき、加倉はもっと打算的なことを考えた。下河原』授の研究資料は書籍だけでも膨大なものであった。

花紀が養女になることに賛意を示

し、加倉は花紀に愛の言葉も用意した。

しかし、加倉は無粋な男であったが、さすがに、花紀が下河原の家で過ごすことになった初めての夜は、下河原に対して妙な妬心（としん）もあって、花紀を守るように、その夜は、恩師の家で泊まったりした。

下河原と花紀の仲を疑ったのだ。

何回かそんなことをしているうちに、加倉は下河原から「今夜は他に客があるから」などという理由をつけられて宿泊を拒否された。そのことを、花紀に問い質したら、事実反していることが、加倉にはわかった。

月の半し 月の満ちる頃になると、花紀は有興（うつ）けの症状を示すようになった。

気が鬱（ふた）ぎ、そして、顔が蒼白にな

り、普段より無口になった。

もう一つ、加倉は花紀の不審の行動を知った。『木簡人形』について花紀が資料収集をし、それらの資料は大学の研究室には置かず、家に持ちこられた。どこか、秘密めいていた。加倉は花紀が特に『呪いの人形』に強い関心を持っていることを知っている。

研究の上での妬心も重なって、秋の終わりの季節、加倉はひそかに下河原の部敷に忍び入った。古い造りの家には渡り廊下があり、いくつもの小部屋があった。加倉は花紀の部屋の隣りの納戸（なんど）に潜み、下河原と花紀との間で交わされる、この世のものとも思えぬ物語りの一部を聞き取った。

下河原と花紀が一つ部屋に入ると、やがてのこと、怪しげな、生ぬるい風が吹き、加倉自身も怖気（おじけ）立ったものを覚えた。この家そのものが、魔霊の棲家にでもなっているようだった。加倉はその恐ろしさに耐え、ただ、ひたすらに、聞き耳を立てた。

下河原と花紀の二人が共有する「魔の時間」のことを知った。闇に葬られた靈事（まじごと）の秘密を嗅ぎつけた。

加倉は学究の徒として行動した。

私欲とも言うべきかも知れない。

おのれの名を高めるためにも、下河原が取り組んでいる研究課題をわがものにしたかった。

下河原が聞き取り、「録したノ一」、集めた資料に、加倉はひそかに眼を通した。

一部は花紀の部籍にもあった。

一つは、『木簡人形』についての「述である。木簡は上代では、おおく、紙の代わりに用いられた。平城京の時代の遺構から発見される木簡には、お役人の出欠用のために用いられたと思われる位と氏名を「したものや、中には、給料の前借り証文である月借錢の木簡なども発見されており、木簡自体が広く用いられていたことになるが、人形（ひとがた）となると、話はまがまがしい色を帯びる。

以下は、『木簡人形』に花紀が興味を持ち、小論文をしたためた一節である。

「人形が形代（かたしろ）とされ、人の身に代わるものであることは雛節句の日に流し雛の習が伝えられた一事からも、上巳（じ

ようし)の祓(はら)いの人形(ひとがた)の遺習を後の世に見ることが出来る。平城京の人形は水無月(みなづき)の禊(みそぎ)祓いや、大つごもりの大祓いにあたって、当時の人：が、それぞれ人形を作って川に流したと考えられている。平城京宮趾から出土する木簡人形は内裏の排水溝に流されたり、あるいは井戸などに投じられたものであるというのが一般の説である。禊や、祓いなどをするときに使うこれらの木簡人形は贖物(あがもの)の一つで、身に代わるものとされ、身に受けた穢れや禍いを形代に移して水に流し、棄てることで、人は災厄から身を守つて来た。本来は贖物であった人形(ひとがた)は、別の使用目的も附与された――

あとには、病氣治療のために用いられたのではないかとさる典藥寮(医学所)から出土した呪術用の木簡人形のこと「され、その「述のあとに、人を調伏したり、呪つたりするため用いられたと思われる木簡人形の発見事例、史実などが研究レナー」として附されていた。

(藤原廣嗣を殺したしたの吉備国花日なの

か?)

下河原の関心はこの一点から始まっている。まず花日媛が実在の人物であることが実証されており、『吉備国遺文』なる古文書の中に、その出生に関わる一文があった。

花日媛は宮廷に仕える采女（うなめ）の一人で、吉備国の族長の娘として生れ、この時代の習いに従って、権力者の許に差し出された。采女は郡の少領以上の姉妹及し子女の形容端正なる者を貢するなどという一文も、古代の采女制度のことを「した書物の中にはあるから花日媛も、また、見目麗しい女性であったことが、加倉には想像出来た。

加倉はこれらの話を得た上で、『下河原』授になり代わり、次に、展開される物語りのストーリーにさらに強い関心を寄せた。

3

花日媛を藤原廣嗣が見初めたのは、咲く花が薫（にお）う麗らかな春の日のことで、花の宴が二人を取り結んだ。奈良桜（八重桜）の花

が満開の頃で、やがて、参会者の興がのり、歌会となった。都」との貴人たちは大らかな恋の歌を謳歌し、この時代、多くの恋歌を残している。

花日媛は女官としてでなく、誘う者がある。この花の宴に加わった。

野遊」の中心は「花見」と「歌垣」で、歌会では男の掛け歌に、女が返し歌で答えた。

このとき、花日媛は廣嗣という貴人に、恋歌を通して、恋の心を伝えられた。掛け合いを浮け、返し歌をしたが、判じる者は、廣嗣の勝つとした。掛け合いに勝つと、相手を獲得できるといのが、この時代の慣わしだった。

花日媛は、一眼見たとき、廣嗣を好きになった。男と女にとって、とても、ロマンチックな出会いだったことになる。

実は、花日媛の許には通う男がいたが、自分の心が冷えかけていたこともあって、高貴な身分の男性に心を移した。

男は連明足（むらじのあきたり）と言う名で、陰陽寮の書生のようなことをしていた。

陰陽寮は天文の暦づくりもしていたが、吉「を占ったりの神占巫術も執り行う。

明足（あきたり）と言うのは、謂わし、呪術師の



役を負っていたことになる。

たちまちのうちに、廣嗣と花日媛の恋物語はスキーンダルよろしくぱっと都に広まった。明足がよからず思わないわけはない。

だが、まだ駈け出しの陰陽師のこと、到底、廣嗣に太刀打ち出来る相手ではなかつた。

一方、廣嗣は花日媛との恋に夢中になっているうちは得意絶頂の顔をしていられたのだが、こと政治に関する限りは、人に陥れられやすい立場にあった。自身、藤原字合の長子であるという自負もあったが、まわりの者があれこれと画策した。

時の権力者、左大臣の職にある橘諸兄（たちしなのもろえ）は廣嗣の祖父の夫人、橘三千代の先夫美怒甕（みぬおう）の長子で皇親の血を引いていた。だが、不比等の四子が不慮の死を遂げたことで、藤原一門の威勢が削がれたのであり、橘諸兄は時の運を得ただけのことであった。

また諸兄に重用された玄昉は畿内の、そして真備は備中の豪族の出、本来なら政治の中枢を預かる身ではなかつた。

物語は、人物関係がはっきりしていないのだが、連明足のペースですめられる！。

天平六年七三三三月に諸国を惑わす大地震が発生した。この天災地変を、その年の初め、明足が予言し、彼は政府の要人の或る高官から目を掛けられた。予言と言っても口の端に乗せた程度のことだったが、彼はその高官と、私人としても付き合うようになった。

高官は、藤原廣嗣の周辺を前：から嗅いでいる内偵者に通じている者だった。

明足は廣嗣に花目媛を奪われた私怨もあつて、廣嗣の一族の者が、都に災いをもたらすことを、この高官に進言した。

怪しげな巫術の結果のことである。

廣嗣が、忤く大宰府の地に、格下げになり任官させられることになった話のきっかけは、恋仇の男がお膳立てをしたのであった。

男と女の三角関係、怨みの構図はこの私怨のもとで、先ず、火がつけられたのであった。

下河原の「した物語は、政争のウラに隠された男と女の愛の物語を浮き彫りにさせて来た。下河原は、花紀自身が、うっとり

した表情で語る花日媛と廣嗣の恋の日：のことどもに、いつときは聞き惚れた。

さながらに、猿朝朝ヲ卷に描かれた貴公子と姫君の逢瀬（おうせ）のひとときを見ている思いになった。

廣嗣は来る日も来る日も、花日媛の許に通って来た。蜜月のような日：が過ぎ、やがて秋が訪れようとしていた。

「思え」お前を知ったのは、あの花の宴の折り、桜花がいまを盛りと咲いている頃であった。季節は移り、早や秋の風が吹き始めているが、わたしはお前のことがなおいつそうに好きになっている。なぜなら、お前はいまでも美しい桜花のように咲き匂い立っているからだ」

寢所に二人が寄り添い、秋虫のそぞろの音に、耳かた下けていたときのことであった。

儂い女の恋、いつの日かは別れのときも来ようと、花日媛がしんみりとした気分になっていたときのことである。

少し恨めし気な眼で、花日媛は廣嗣を見やり、言った。

「わたしの心は変わりませんが、あなたさまは都では聞こえた浮き名の君、女は哀しいも

のでございます。一本（ひともと）の花の樹を咲かせ、恋しきひとを待つ他はないのです。考えてもごらなさい。女は気ままに諸国をめぐること出来ないのですよ。その点、あなたさまは：いえ、わたしは花の宿命を持つ女に生まれたことが恨めしいのでございます」

女の口調は、手弱女（たおやめ）の女の風情なども、そこはかたなく見せたので、廣嗣は、このとき、花日媛に都で聞き知った木簡の怨み人形のことを話した。

自分は心変わりほしくないということをするためのであった。

「西の京の、ほれ、東禅院の外れに侘し住まいる女が、何やら、陰陽師に、蠱事（まじわざ）を頼み、袖振り合さぬになった男に、呪いを懸けたそうだ。男の顔を描き、眼には斎串（いぐし）が二本突き立てられ、胸にも一本、深く呪いのその削掛け（けずりかけ）が刺さっていた」

女は疎ましいげな眼をし、いつとき、

男の顔を見たが、直ぐに眼を伏せ、

「わたしを裏切ったら、わたしだってそうしますわ」と言っふうの顔をした。

それで、男はつい、余計なことまで喋ってしまった。

「人に知られるようなことでは、呪った相手に霊験（ききめ）を及ぼすことは出来ないのだ。闇の中での話でこそ怖ろしくもある。それからこれは陰陽師から聞いた話だが、相手を呪うには胸に呪いの文句を「さね」ならんそうだ。この人形の胸には重病受死とあった。病いを得て苦しんで死ねという意味だろう。だが、この呪い文も人に知られている。わたしが知っているほどだからな。ほんとうは、人には読み取れない作りの文字を「すのがその法らしい」

廣嗣は自分が仕入れた話を、得意気に話した。

廣嗣は花日媛の前の男が、陰陽師としては、まだ、駆け出しの職分の連明足であると言うことなどは知らない。

身分もまるで違うし、廣嗣の恋仇きの相手でもなかった。

ちらと、花日媛は、なお、しつこく付きまとう明足のことを考えたが、このときは深く考えなかった。陰陽師ということに明足のことを思い起こしただけのことである。

このとき、廣嗣は調子に乗り言わずもがなのことまで喋ってしまった。

「お前はわたしの真情を疑っているようだ。どうだ、二人だけの結吁を持つために、二人だけの呪文の文句を決めておこうではないか。これはわたしたちの愛の世吁に邪魔なものどもが、立ち入らぬための法だ。わたしたち以外の者に知らせたり、解説されない限り、呪いを懸けた者に呪力は持続される。つまり、お前がわたしに懸けたのなら、わたしはこの世が消滅せぬ限り、お前のものになる」

そう言い、このとき、睦言の続きであつたせいもあつて、廣嗣は花日媛に二人だけの、謎の呪文を伝えた。

結吁と言うのは文字通りに解せし、境吁線ということになる。仏』では一種の修法を行なつて、外道（げどう）・悪魔の侵入を防ぐ意として用いられることもある。呪いの人形に斎串（いぐし）を打つのも、そこに、結吁を作るためで、元をラれし、卒塔婆などもその範疇に入るとされるからだ。

呪術として見た場合は魔力を呼レ込む一種の仕掛けということになる。

廣嗣と、花日媛は呪法の一つを用いた。お

互いの手の甲と甲を合わせ誓った。

掌同士を合わせるのは愛のしるし、親しみの情を表わす作法であるから、その逆のまじないの作法に従ったのであった。

それから、廣嗣はまた言葉巧みに、花日媛の心の内をくすぐった。

「結句のあるところでは、男は樹木で、女は花弁をあらわすそうじゃないか。もう二人は一つの身だ。わたしという樹の枝でお前は精一杯、美しい花を咲かせれ」いいのだよ」

「せいぜいわたしはあなたに悪い虫がつかないように気をつけますわ」

花日媛の拗（す）ねた気分は少しは治った。廣嗣は花日媛の手の甲に、二人だけの呪言の文字を「した。

齧字で三字の《造語》だった。

一呪法の作法通り、その造語を、廣嗣は逆字として「した。

逆様にし、花日媛に』えた。

あくまでも廣嗣はあそ」のつもりであった。だが、花日媛はその二人だけの秘密を意味する呪いの文字をしっかりと頭の中に印した。

いつの世でも女は、男の二心を疑ってい

るものなのである。

花見月が中天に懸かり、満ちた頃、下河原はまた花紀のおどろおどろしさに触れた。

吉備国花日媛(き)のくにのはなひめ)が、花紀に憑依(ひょうい)した。月の満ちる夜のことで、座敷内には月の青白い光がとどけられていた。

これまで下河原が〈魔の時間〉から聞き知った話では、藤原廣嗣は乱のあと、僥倖(ぎ)ようこう)あつて生き延(の)び、諸国を流浪したあと、春の桜花が咲き乱れる頃に、平城京に舞い戻って来たことになっている。

花日媛は、陰陽師の連明足(むらじのあき)たり)に唆(そ)その)かされ、また、自分を捨てて行った廣嗣に怨みの情を晴らすために、呪いの木簡人形を作り、廣嗣をとり殺す黒い『式を行なった。一

廣嗣は、花日媛とは衣(きぬぎぬ)の訣(く)れもする間もなく、慌しく、西海道の地に発



った。廣嗣に妙な行動をさせないために、為政者が急な勅命を下したのである。

いまで言うなら、廣嗣の場合は、ししらくの間の地方勤務ということになり、赴任させられた地に住みつくつもりはなかったということになるが、貴人のこと、都落ちしたシヨックはかなりなものであったと思われる。

都での暮らしを思うにつけ廣嗣は花日媛への慕情が募った。

手紙とてままならぬ状態だったが二度や三度は都に文を送った。

運の悪いことに、その文も花日媛の許にはとどかぬままになった。

おまけに明足が廣嗣の身邊の女についてあることないこと千里眼を持った男のように耳に入れたので、花日媛は怨みの思いを強くした。

花紀から下河原がこれらの話を聞き取るまでにすでに六カ月余が過ぎていた。今夜は最後の件（くだり）を下河原は、花紀の口から聞き出す気になっていた。

だが、下河原は怖い想念にも取り憑かれていた。花紀は昔語りをする度に痩せ細り、日…、顔色も悪くなり、まるで病いを得

ているかのようになった。このままでは、花紀は魔霊に取り憑かれて死ぬかもしれない。

下河原は自身も健康状態が悪くなっていた。あと一回、あと一回という思いを持ち続けながら今日まで来た。

いま、下河原が眼にしている花紀は死霊のようであった。

虚ろな眼を彼に向けている――魔霊の花日媛が取り憑いた花紀が、また、昔語りを始めた。

「：春の月野に、はらはらと桜の花が散り敷く夜のごとでございました。左京の山の辺りの浅茅ヶ宿（あさじがやど）に、わたしは女の一念で、恋しき者（ひと）を差し招いたのでございます…」

今夜で話を聞くのは七回目のことである。話は核心に触れていた。

もの静かな語りで始まったが、このとき、いつになく花紀は昂奮状態を示し始め、宙空にあらぬものの影を求めた。両手を差し出し「うおっうおっ」と叫び、そして一種の憑霊現象（「ランス」）状態の中に身を置いた。

あの、黒い雲は、いまは花紀白身の逆まなく黒髪にかたちを変えていた。下河原白身

も、おのれの靈氣を、いとられて行くのが判った。相手との一体化現象だった。

心の中に用意されたもう一つの心霊体が感得しているのだった。靈的交信の渦の中に巻き込まれた。

花紀の唇が苦しそうに歪み、息が乱れた。

また、下河原の胸は痛んだ。

自分が学究心に名を借りて花紀を問い詰め、苦しめていることには苛責の思いがあったのである。花紀と下河原の間には默契（もっけい）のようなものがあつた。

学者としては下河原はこの非現実の間（ま）をすくって信じているのではなかつた。

花紀が口走つたことを実証するため、その裏付けの資料などを下河原は集めた。それはまた花紀の仕事でもあり、彼女白身が興味を寄せていることでもあつた。

默契と言わずとも二人の関心事が、このようにことをすすめたのである。

しかし、この夜は花紀はことさらに狂態を示した。花紀は寝衣の裾を乱し、そして胸乳（むなち）を掻き、女の肢態を明らさまに下河原に示した。

恋しい男を迎えるように、花紀は身悶えさえして見せた。花紀の顔も仕種もどこか艶を含んだ。

下河原は息苦しくなった。

月野に立つ桜の樹下にある自分を思った。  
話の件（くだり）は、板櫃河（いたしつがわ）の戦いで敗走した廣嗣が恋しい花日媛が待つ花の都に、半年の後、やっとドラり着くところまで来ていた。

花紀は花日媛と一身であるということ  
は下河原は素直に信じて来た。

彼は御陵の発掘調査や遺物調査に携わったとき、これまでも、夢見で、忪い世吁の者たちと話をしたことがある。少しは靈感のようなものも彼にはあったのかもしれない。  
あくまでもこれは彼自身の潜在意識がそうさせたことだが、その限りでは霊力というものを下河原も信じて来たことになる。

花日媛と、花紀の場合は、昔語りによれし  
同じ霊波（オーラ）を持つ者同士で、幽体の  
霊波が同調し合っているということになる。

さらに言えし、この波合の現象は極く極

くまれなことで、花日媛はわが意をこの世に伝えるために実に千二百年有余、このときを待ったことになるのであった。

「廣嗣はわたししの呪殺の術にとらえられ、やがて、夜も明けんとする頃、殺されるであらう…」

たった今まで艶めかしくも見えた霊の移り身の花紀が、このとき、冷えた月光の化身になり、全身から青白い妖光を放った。

花紀ではなく、昔女の姿かたちが下河原の眼の前に現われ出でようとしていた。

下河原はなお息苦しさを覚えた。

何かを見たとき、心臓の高まりが極度に達し、そして、脳膜の薄い血管が破れた。

「うおっー」

と一声叫んだだけで、下河原は畳の上うつ伏した。持病の心臓疾のためか、胸が痛いように締めつけられて来た。

ひとり、座敷の闇の中で、しらくの間、怨みのこもった昔語りを続けた。

花曇りの一日のことであった。日曜日の午後、加倉と花紀は近鉄大和西大寺駅で待ち合わせた。花紀が加倉を誘った。

『下河原』 授が心臓発作で死んでから三週間ほどの日が経過していた。

今日は花紀が『呪いの木簡人形』のことで話があると言ったので、加倉はその気になった。一部はすでに話は聞いている。

前に会ったとき、加倉は花紀に「先生は呪いの人形にきつと魅入られて死んだのよ」と謎めいた言い方をされていた。

二人は歩きながら話をした。

花紀が語り掛けた。

「満月の夜になると：わたしはタ  
ー  
リ  
ップして千二百年前の昔に還るのよ。この話、加倉さんは全部知っているんでしよう。あなたが、納戸（なんど）に潜んでわたしと先生のことを探ろうとしたのも、資料を漁ったのもみんな知っているわ」

花紀の口調には疎ましさがあったが、別に咎め立てているふうはなかった。

「それなら話は早いさ。花日媛が廣嗣を殺したと告げたことからお伽話は始まった。霊の

力を借りたとは言え、史実の一ページを塗り変えようとしていることには変りない。いちしん、下くにも興味があることは、木簡人形に「された花日媛が「したと思われる呪いの文字さ。先生のノー」には、逆さの呪い文句、三字が、木簡人形の胸には「されているという見解が示されていた」

加倉は花紀のペースにのせられ、勢い込んで言った。

「でもね。先生はその三文字を知ろうとして、きつと霊にとり殺されたのよ。いまわかってるのは先生が平城京跡から出た問題の木簡人形を調べた結果、いちしん上に「されていた天地が逆さまになった文字『叢（くさむら）』の字を解読したことだけ、あとの二文字、つまり造語としては三文字のうちの上の二文字がまだわからないのよ。あとの二文字の部分は腐蝕していて読み取るとは難しいわ」

「その『叢』の文字がいちしん下になる三文字の造語なのか」

と加倉は花紀に問い、あとの謎掛けの文字を探っているふうの顔になった。

「知る方法ほ一つだけあるわ。あなたが先生なり、わたしはまた、花日媛になる。わたしは自分

の喋ったことは何一つ、覚えていないのよ。先生が自動筆「のようにして」「したことだけがただ一つの真実よ」

「その真実については、下くも知りたいことさ。問題の三文字が解読出来るんだから」

二人は頷き合った。

「ね、あなた、もしもよ。わたしが先生のように呪い殺されるのだったら、あなたはこの話から手を引く？」

と花紀が探るような眼になり、加倉の顔を窺った。

「花紀の痩せ方はふつうじゃないさ。心配はしていた。だけど……」

「だけど、ナニ？」

「呪われているとかいないとか、それはわからないことさ。現に先生は、持病の心臓発作が原因で……先生が呪われて殺されたのだとしたら、この下くだって、同じ運命のもとにあるかもしれないし」

「あなたも殺されるかもしれないわ」

花紀は、薄気味の悪い笑いを、このとき、口元に浮かべたが、加倉はそのことには、気付いていなかった。



「ともかく、学者ならずとも知りたいたいことさ。闇の一ページを開くというのは、それだけ意味がある」

「そうよね。わたしがあなたの立場でも、この話の続きは知りたいわ。あなただって殺されるかもしれない立場は承知した上でのことでしょ」

花紀は話の顛末を愉しむ口調にもなっていた。加倉はあまりいい気はしなかったが、反論はしなかった。

二人はいつの間にか薬師寺の西塔と東塔が斜くに望める勝間田池の西岸にドリ着いていた。

薄曇りの空の下に古色蒼然とした寺の伽藍（がらん）が控えている。

池の面に小波（さざなみ）が立った。

風だけは生暖かい。

池のほつりを歩く二人の姿が、水面に捉えられていた。その影は一つに合わさるようになった。

「ね、わたしと加倉さんの仲って、一体、何なのかしら？」

と急に、花紀は話題を転じた。

「何って、それは…」

不意のことだったので加倉は口ごもった。  
「これはあくまでも、わたしたちの間の、個人的な問題よ。あなたは、ほんとうにわたしを愛しているのかしら？」

「そんなこと訊くまでもない」

加倉は取り繕ったふうに答えた。

「二人は：愛の交じわりを持ったこともないわ。たしかにわたしは、魅力のない女だけど。どこか変よ、わたしたち」

「それは考え過ぎさ」

「それじゃ、あなた、今度の満月の夜、わたしを抱ける？」

花紀は大胆なことを口にした。

「ああ：」

とだけことしを返し、加倉は視線を落して池の水面を見た。風が立ち、池に写っていた二人の影が乱れるように揺れた。

「わたしのところに、夢の中でのことだけど、巫告（ふこく）があったのよ。桜の花の咲く樹の下で、あなたは廣嗣になり代り、そしてわたしは花日媛になって愛を語り合う：わたしたちはその日の夜、永誓に結ばれるのよ

。そんな話をわたし作ってみたの」  
花紀はうつそりとした口調で言い、定まらぬ視線を池の面に投げた。すでに深い闇に身を置いていよう顔になった。加倉は怖気（おじけ）づいたが、もはや、引き返すことは出来ないと思った。花紀の顔は見返さず、おのれに決心を強いていた。

7

廣嗣と花日媛との愛の物語は、仲を裂かれたあと、一転して、呪い話にと様相を変えて行く。廣嗣は、敗走し、山野にひとり迷い込んだ。無念の思いに齒ぎしりしたが、京師（みやこ）は行く、そして野望は潰（つい）えた。

挫けそうになる気持ちを支えてくれたのは、廣嗣を呼ぶ花日媛の愛の囁きの声だった。

ある満月の夜、廣嗣は花日媛がおのれを差し招く姿を闇間にみとめた。

樹葉の枝が騒ぎ立ち、どこか、物の怪の匂いを夜風は運んで来たが、廣嗣はときなら

ぬこの情景に、すっかり魅せられた。青白い月の光が妖艶な姿の花日媛を映し出した。

薄下りの白い衣は肌が透けて見えそうな危うさをそこに示した。

「わたしはいつまでもあなたさまをお待ち申し上げております。あなたさまのお傷わしいお姿を見るにつけ、このようにわたしの心も哀しさに打ちふるえているのでございます」

そう言い、花日媛はさめざめと泣いてみせた。男心を誘うのか弱い女の役を、魔霊とも見える女は演じてみせたのだった。廣嗣は、うたかたの逢瀬だったが、いたく心を揺さ下られた。愛するものが待つ京師（みやこ）にドリり着き、花日媛を再し、掻き抱くことだけが、敗残の身の廣嗣の大きな望みとなった。

そして、廣嗣は、桜の花の咲く季節に、花日媛の許に、逢いたさの一心でドリり着くということになるのだが…。

その一夜のことは、加倉征矢と下河原花紀の二人が演じることになった。

花残りの月が中天に懸かり、この世にあるものを、闇の光の下にあたり出してゐる時のことであつた。

やがて、丑三（うしみつ）の時も充ち、《魔の氣》が忍し寄つた。山桜の大樹が、山の辺の、ひっそりとした暗闇に一本、立つてゐた。

八重の花しらが、いまを盛りと咲き誇つており、艶めかしくもある白い闇をそこに現出させていた。古くは、ナラノヤエザクラと呼しれた花卉のやや小さい品種で、それだけに優美さを湛えた花の風情であつた。

その樹下とお下しきあたりに、うら下れたふうの浅芽（あさじ）ヶ宿があつた。

半し朽ちており、あたりの草も伸るにまかせ、荒んだ光景となつてゐた。

身に下ろをまとつた一人の男が、山路を何かに取り懸かれたように、さらしいなながら歩いてゐた。

両眼は見えないらしく、杖のようなものをつき、頼りなげに山の坂を登つた。

しかし、このとき、男には妖しく綻（ほころ）した桜の花叢（はなむろ）が見えてゐた。心の眼のようなものが、見開いており、

男は花の美しさに誘われて、この山里に踏み入ったのだった。

小さな草の丘に立ったとき、樹下に添って

ある宿をみとめた。仄かな明りが、微かに洩れている。それは古戸の隙間から洩れる燈火であった。男は胸をときめかせた。

恋しい女を、ここまで訪ねて来たのである。そんな想いもあり、こころ逸るままに、古戸の前に立った。

男は咳(しわつき)をし、おのれの声を、内に居る者にとどけた。

「どなたですか？」

怪しきものをたずねる、女の声が返って来た。

「わたしだ。廣嗣だ。お前が恋しさに、わたしは、このような身になってもお前のところに戻って来た」

この場の、当の男の名は、藤原廣嗣だった。

古戸が開き、顔を見せたのは花日媛(はなひめ)だった。青白い妖気を漂わせながら、女の姿は浮いて出た。

垢染みた袖衣に、乱れたまま肩に掛かった伸  
L放題の髪、そして、落ち窪んだ二つの眼、頼

もこけていた。廣嗣は相手を怪しげだと感じとった。足を踏み入れるのを躊躇ったが、心眼で見た女の顔は花日媛に違いなかった。

花日媛はさめざめと泣き、肩ふるわせた。髪の毛に、桜の花の挿頭（かんざし）が一本、挿されているのが、女ごころを表わしているようで、廣嗣は不憫（ふしん）でならなかった。「あなたさまには恨みの思いもあります。でも、もう言いますまい。お姿を見たとき、また恋しさがつのってまいりました。このままに、わたしは恋い焦がれて死ぬところでございました」

と女は言い、男を内に招き入れた。

「お前を、掻き抱きたいと何度思ったことだろう」

男が真情を込めて言うのと、

「夜は短こうございます。さあ、ウイの閨房（けいとう）にお出で下さいませ」

と女が誘った。

もう、男は気もそぞろになり、おのれの迷いを忘れて女の背に従った。

女は、待ち焦がれていたように、白い袍衣（ほうい）を、はらりと脱ぎ捨てた。

白い匂うしかりの肌が浮き立った。

その妖（あや）かしの肩先に、ひとひら、ふたひら、桜の花が散りかかった。

「おお、艶なる花の風情であることよろ

」

男は言い、天井の高さとも見えるあたりに、視線を移した。葎根のあるところと見た高処（たかみ）には、おおうものはなく、皎々（こうこう）と光を放つ満月が、花桜の葎枝先に懸かっていた。

花の宴で知り合ったありし日のことが、男の臉の裡を掠めて過ぎた。

「わたしは、男憎さのあまり、ひそかに木の人形を作り、男を呪いました。男からは頼りもなく、耳にあるのは、葎地での浮いた話しかりであったのです。廣嗣はやがてのこと、西海道の地でことを起こしました。京師（みやこ）では、廣嗣軍は敗走し、主謀者の廣嗣は捕えられて殺されたと伝えられました。そんなある日のこと、連明足（むらじのあきたり）がわたしに、呪いの作法を』えたのです」

いまは主のいない奈良山の麓の家で、これまでと同じように、花紀は、花日媛になり変り、加倉を相手に、一人の語り部となった。



午前二時を過ぎた時刻の頃のことである。

この夜しかりは、夜風も凍り、月の明りも冷え冷えと冴え渡っていた。

霊は、花紀の心身に宿る靈氣を、ひとり、そして、立会者の加倉からも共振波の靈氣を、い取った。

その力を借りながら、昔人たちは千二百年前の姿かたちになる。ここには、恋物語の設定が整えられていた。このとき、加倉には花紀の姿は見えていなかった。

垢染みだ白い衣、乱れた髪、そして落ち窪んだ眼をした女が、加倉の眼の前には坐っていた。やつれた感じが花紀に似ていただけのことであった。

「∴呪いの斎串（いぐし）を両眼に打ったことで、わたしの愛しい男性（ひと）は、浅茅ヶ宿にドリ着いたときは両眼が見えなくなっていました。桜の花を見、わたしの姿を見ることが出来たのはあのひとの心の眼が見たことなのです。わたしは愛するひとを呪い殺しましたが、あとで、連明足（むらじのあきたり）と大野東人（あずまんど）がわたしを利用し、あのひと

を殺させたのだと知りました。いまこそ、わたしは真実の愛のために生きるべきなのです。二人が作った呪誼のこと」の結句のために二人の愛は千二百年の余り、魔封されて来たのです。わたしが、木簡人形の胸に込めた文字は……」

女の声はいつもの陰……滅……の響きが失くなり、どこか気負ったものとなった。

加倉と花紀は、その前に、花日媛の呪いの法を知らされていた。

この法のこと、二人が知りたいことの一つであった。花日媛は連明足（むらじのあきたり）に授けられた法を次のように語った。

七月七晩、相手を呪い、一本の桜の樹の下で、人に見られぬよう花日媛は行の司祭者となった。

男の名を口にし、呪いの気持ち満身に込めて、呪言を唱えた。

「天地陰陽神変通力（てんちおんようじんぺんつうりき）」

この呪言を口にしながら、花日媛は次に祭壇に用意した七本のろうそくを一夜ごと

に、一本ずつ、木刀を振りかざし消えた。

七日目の夜、残った一本のろうそくの灯で、木刀から花日媛は、木簡人形を作った。

墨で目鼻、ひげを描き、廣嗣との間で言い交わした呪いの三文字を逆字にし「した。

このあと木片を削りとって作った斎串（いぐし）を三本、両眼と胸に打ち込んだ。残された一本だけのろうそくの灯を自分の息を吹きかけ消した。密かに呪具を持ち寄り、平城宮大膳職内の井戸に投げ込んだ。

これが、花日媛が執り行なった呪いの秘法である。いよいよ、花日媛が、加倉と花紀に、呪いの三文字を伝えるときが来た。

このとき加倉と花紀は相寄った。

花紀が、いつか、下河原の前で狂態を示したときと同じように、乳房を掻き出すようにし、そして淫らな感じで膝を割った。

両手を花紀は差し出し、加倉を誘った。

加倉が眼の前で見ていたものは、満開の桜の樹の下にある白い闇であった。

その樹下には赤い毛氈（もうせん）が敷かれ、その褥（しとね）の上には、藪（ろう）たけた古えの時代の、眩しいしいしかりの美

女の裸身が置かれてあった。

加倉は……この幻のツブ図の中で、花紀を抱きとろうとしていた。さながらに、廣嗣と花日媛の、死の闇での逢瀬のひとときのように花日媛は、呪いの三文字を口にした。

「叢（くさむら）に花を探す。あのひとは、どのように広い地平であれ、深い闇であれ、小さな花をくさむらで探すときのよう、可愛いお前が咲かせた花をわたしは探すであろうと言ったのです。花探叢（かたんそう）、二人だけが造ったこと」ですが、わたしには愛のこととして聞えたのです。いえ、愛憎の末に、愛のこと」は呪いのこと」となってしまいました。でもいま、わたしは他人に呪言を知らせたことで、魔封をされたあのひとを取り戻すことが出来たのです。そうです。あの人は浅茅ヶ宿に訪ねて来たとき、待ちくたれ死霊となつたわたしの亡骸を抱き、その魔力に取り憑かれて死んだのでした……」

このとき、加倉の心臓のあたりに、きりりと痛みが走った。鋭い針のようなものが、胸には突き立っているかに思えた。

花日媛に呪われ、魔呷に封じ込められていた

藤原廣嗣は、このとき、呪縛を解かれ、吉備国花日媛（き）のくにのはなひめ」と共に、桜の花が咲き誇る愛の世に旅立った。

加倉は呻き、そして、胸を掻きむしって死んだ。なお、花紀は白明の闇の中で、何やら語り続けた。

「あなたはわたしをほんとうに愛しているの？」

そんな、お互いの愛をたしかめることしを、花紀は何度も口にした。

朝が明けたとき、どこもしれぬ山里の大きな桜の樹の下に、二人の姿があった。

男のほうは死んでおり、女のほうは気でも狂ったのか、男の死体に身を寄せ、その体の上にもたがり、ただ、嬉しそうに笑っていた。

双乳（もろち）が揺れ、怪しげに、生白い女の腰が動いた。視点が定まらぬままに、あらぬ空間に、女の眼は向いていた。

明るい陽がさし染め、桜の樹は白い闇を払って、くつきりとその姿を現わした。

風が強く立った。

天の国に立つような光明さえ花樹は放ち、

そして、朝焼けの空を背に桜の大樹はなお風に吹かれた。はらはらと桜の花<sup>L</sup>らが舞った。

やがてのこと、見渡す限りの地を白く埋め尽くそうとでもするよう……。

(了)